



# 飼育

Breeding report

# レポート



Breeding report  
1

大森山で過ごした50年

## フラミンゴ「スグリ」の旅立ち

飼育展示担当(動物専門員)  
奥山 麻裕子

1975年に大森山動物園へ来園したフラミンゴのスグリが2025年11月に亡くなりました。

スグリは10年ほど前から視力を失っていましたが、大好きな水浴びや草むしりを楽しみながら、群れの中で徐々に適度に過ごしてきました。2025年には来園50周年という節目の年を迎えましたが、9月に入ると座っている時間が増え、自力で立ち上がることが難しくなりました。

そこで、脚の筋力低下を防ぐことを目的としたリハビリや、事故防止と採餌のために、夜間は室内に収容し、群れと隔離するなどの介助飼育をスタートさせました。毎朝、スグリを抱えて群れのいる室外のプールに連れて行くのですが、仲間と一緒に水浴びをすることで調子が良くなったのか、元気に歩いたり、首を伸ばして羽繕いをしたりするなど、水鳥らしい活発な姿が見られるようになりました。9月はエサを食べられない日が続き、飼育員の支えがなければ立つこともできない状態でしたが、リハビリや介助が功を奏したのか、10月には体調が回復し、エサを完食したり、自力で歩行する姿も見られました。ただ、こうした状態は長くは続かず、再び状態が悪化し、11月3日にその生涯を終えました。

いつときではありましたが、最期に元気な姿を見せてくれたスグリから、動物の生命力の強さを感じました。

これからは天国から大森山の仲間たちを見守っていてほしいです。



最期に強い生命力を見せてくれたスグリ

Breeding report  
2

## 新入りのエミュー「燦」について

飼育展示担当 主査  
鈴木 昌典

2025年10月27日、メスのエミュー「燦」(2歳)が伊豆シャボテン動物公園から大森山動物園にやってきました。

エミューは、ダチョウに次いで世界で2番目に大きい飛べない鳥です。飛ぶことが出来ない代わりに足が非常に発達しており、時速50kmの速さで走ることができます。

初めて燦を見たとき、その立派な太い足がとても印象的で、当園にいるオスのミーとケーよりも一回り大きく感じました。見たことのない風景、獣舎、飼育員、さらに隣には見慣れない動物(キョン)がいて不安だったのか、燦は来園後しばらくの間、鳴き続けていました。

実は、この鳴き声こそエミューの特徴のひとつなのです。オスとメスでは鳴き声が違い、オスは「グー」という低い声、メスは「ボンボン」「ポボン」とドラムを叩くような低い声で鳴きます。初めて燦の鳴き声を聞いたとき、本当によく響く低音で驚きました。

来園してすぐの頃は、エサをなかなか食べてくれず、一日中ずっと鳴いていましたが、時間をかけてエサの内容や配置を変えていったところ、次第に食べてくれるようになり、鳴く時間も少しずつ減って、最近ではほぼ鳴くことがありません。

施設に慣れてきた様子なので、今後はペアリングを進めていきたいと考えています。

エミューは、巣作り、抱卵、ヒナの世話はオスの役割で、とてもイクメンなのです。卵はアボカドのような鮮やかな深緑色が

特徴で、実際に見られる日が楽しみです。

すぐにでもペアリングに取り組みたいところですが、より良い子育てができるように施設を修繕し、2026年冬の繁殖期にペアリングを行う予定です。

最近あまり鳴くことがなくなった燦ですが、今も時々「ボンボン」「ポボン」と低い音で鳴く事があります。ご来園の際には、エミューの鳴き声と見事な太い足をぜひ間近で体感してください。





Breeding report

## 3 アフリカゾウ・花子の給餌の工夫

飼育展示担当(動物専門員)  
齊藤 光貴

野生のアフリカゾウの群れは、経験豊富な年長のメスがリーダーとなる母系家族が基本です。オスは、成長すると群れを離れて単独で生活し、繁殖期になるとメスの群れに近づき交尾をします。成熟した若いオス同士が一時的に群れを作ることもあります。

大森山動物園では現在、アフリカゾウの花子(36歳、メス)を飼育しています。以前は、花子の他にだいすけというオスも飼育していましたが、2021年に亡くなり、今は花子を1頭で飼育しています。

野生のゾウは、群れの中でコミュニケーションを取り合いながら生活しています。花子は1頭で生活しているので、飼育員がコミュニケーションの相手です。そこで、飼育員同士で、花子の日頃のストレスを軽減できる方法を話し合い、自動給餌器やフィーダーを作成することにしました。自動給餌器は、タイマーで夜間の決まった時間に自動で餌を与えることができる装置です。また、フィーダーは、動物が工夫しないと簡単にエサを取り出せないような仕組みになっています。このようにエサの採食に費やす時間を延長させることによって、ストレスを感じる機会を減らすことができます。

フィーダー設置当初は、おそろおそろ触れてみたり、エサの採り方が分からず苦戦していましたが、1週間が経過した頃には

得意気にエサを採食するようになりました。この給餌方法で、花子のストレス軽減に一定の効果が見られたため、次は2026年内にタイヤを使用したフィーダーを作成しようと考えています。

今後も、花子が元気で健康に暮らすことができるように様々な工夫をしていきたいと思っています。



フィーダーからエサを取る花子

## 動物病院から 飼育動物の終末期について

飼育展示担当(獣医師)  
佐野 功一

大森山動物園には高齢個体が数多くいます。今年も何頭かの動物たちが病気や老衰で亡くなりました。その中には、私が飼育を担当していたミニブタのトン平も入っています。ミニブタの寿命は10~15歳とされていますが、トン平は19歳まで長生きし、2025年11月に老衰で穏やかに最期を迎えました。

そんなトン平の寿命が近づく過程で、考えたり、感じたことがあります。

思い返すと、亡くなる半年前の5月に体調を崩したことをきっかけに健康状態に波が始め、少しずつ体力が落ちていきました。スタッフの間では、ミニブタは暑さに弱いため、夏には冷房のあるところに避暑させてはどうかという意見もありました。しかし、トン平の人好きな性格を考えれば、人の気配が多い今の環境を変えない方が良く判断し、避暑の代わりに、水浴びの回数を増やすなどして暑さを和らげる工夫をしました。

夏が過ぎる頃には、食事をするにも疲れて採食を途中でやめてしまうことが増えました。徐々に食事量が減り、足腰の踏ん張りも効かなくなってきて、転倒する

ことが増えていきました。残された時間はそれほど長くないと考え、延命的な治療は行わないことにしました。最期の1週間のごく僅かの食事を採り、そして静かに息を引き取りました。

これからも、動物たちができるだけ生活の質を維持しながら最期を迎えられるよう、動物の状態に合わせたケアを考えていきたいと考えています。



19歳で大往生したトン平